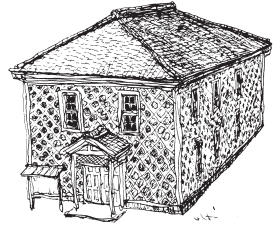


## 演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

やまうちけいた  
山内慶太

# 「一種の気風を感受すべし」——一貫教育確立百二十五年——

六月八日に、普通部の百二十五年を祝う式典が開かれました。明治二十三（一八九〇）年の大学部開設で、従来の課程を普通部と称するようになったことを考えると、その歴史はさらに長いのですが、明治三十一（一八九八）年から数えています。慶應義塾で学事改革がなされ、この年、幼稚舎六年、普通部五年、大学部五年の計十六年の今日に至る一貫教育の課程が確立しました。つまり、今年は一貫教育確立百二十五年でもあります。

慶應義塾の小・中・高の各校は、他に見られるような大学の附属校ではありません。大学までそれぞれが相互に対等な形です。つながっています。それは、「確立」と記したように草創の時期から幅広い年齢の塾生が学んでいて、次第に発達段階に合った教育環境を整えてきたという歴史の経緯からも説明できます。

さらに大切なのは、百二十五年前の「慶應義塾学事改良の要領」の一節です。「十六年の苦学中には一種の気風を感受すべし。即ち、慶應義塾風にして、(略)之を解剖すれば則ち独立自由にして而も実際の精神より成るを發見すべし。是れ義塾の特色に

して、他に異なる所は主として此に存するものなり」とあります。「独立自由にして実際の精神」とは、『福翁自伝』の「有形において数学と、無形において独立心」に対応するものですが、これらに富んだ人を育むという点では、どの年代の教育もかけがえのない大切なものであつて、そこに上下や軽重はないのです。今日、世間一般では校風があまり語られなくなりました。しかし、「他に異なる所」がなければ、敢えて学校を運営する意味はなくなりません。元塾長の石川忠雄氏がいみじくも語った「その形だけが残って、それをつくり出した根本の精神がなくなつたら、慶應義塾は存在しなくなつていいわけです。どこにでもあつてから、そういう学校は。」という言葉は忘れられません。

幼稚舎・横浜初等部から大学までの課程のどの段階から塾生になつても塾風を感受できる学塾であり続けられるように、この塾風を大切に問い続けたいものです。福澤先生は繰り返して、「一種特別の気風」「充滿する空気」を語りました。それを読み解き、その今日的意義を考えれば考えるほどそう思うのです。